Osaka University Knowledge Archive

Title	超越論的語用論の再検討ー現代のフィヒテ主義は可能かー
Author(s)	嘉目, 道人
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51845
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　嘉目　道人　　）	
論文題名	超越論的語用論の再検討 ――現代のフィヒテ主義は可能か――

論文内容の要旨

現代ドイツの哲学者カール＝オットー・アーペルが1973年の主著『哲学の変換』において提唱した超越論的語用論は、カントの超越論哲学の言語哲学的変換を標榜している。だが、その論証戦略や目標設定には多くの疑問や批判が寄せられてきた。アーペル自身は勿論、ヴォルフガング・クールマンを始めとする彼の後継者たちも議論の精緻化を試みてきたが、理解と支持を得られているとは到底言えない。1980年代以降、超越論的語用論をめぐる一連の論争は平行線を辿り、停滞したままである。本稿は、超越論的語用論をカントよりもむしろフィヒテの知識学と包括的に関連付けることを試みる。それによって、超越論的語用論に向けられた疑問や批判への新たな応答を用意しつつ、現代の哲学的議論において超越論的語用論が持つ意義をより鮮明にすることが本稿の目的である。なぜこのような遠回りとも取れる課題を設定しなくてはならないのか。この目的を達成することによって何が得られるのか。それは以下の通りである。

超越論的語用論の画期的な点は、古典的超越論哲学においては意識哲学的な分析に終始したため常に「方法論的独我論」と結び付いていた「主観」の問題を、記号ないし言語の使用者の問題として扱うことで公共性を確保することにある。これによって主観の問題は、統語論（構文論）・意味論と並んで言語哲学の一部門を形成する語用論の問題ということになる。超越論的な語用論というアプローチは、現代の哲学全般に大きな影響力を持つ英語圏の哲学の状況からしても、注目に値するものであるように思える。なぜなら、現代においてカントやヘーゲルは単なる批判や克服の対象ではなく、重要な哲学的源泉でもあると認められており、また、長く意味論研究が活況を呈してきた言語哲学において、近年、語用論の重要性が見直されつつあるからだ。ところが、実際には、超越論的語用論の議論は殆ど支持も注目も得られていないのが現状なのである。その主な理由は、超越論的語用論が強く主張する討議倫理の「究極的根拠付け」という哲学的課題にある。20世紀の「言語論的転回」は「哲学の自然化（ないし脱超越論化）」と一体である、と考える多くの哲学者にとって、このような根拠付けは不可能なだけなく不要なものであり、なぜアーペルやクールマンがこの根拠付けに固執するのか理解に苦しむことになる。

超越論的語用論への批判者としては、批判的合理主義やネオ・プラグマティズムなどが挙げられる。だが中でも特筆すべきは、現代のカント主義者でありアーペルと共に討議倫理学を展開してきた盟友でもあるハーバーマスが、超越論的語用論の究極的根拠付けを批判していることであろう。カント的な古典的超越論哲学の言語哲学的ないし語用論的な変換はすでにハーバーマスによって、脱超越論化された形で（それゆえ現代の諸理論とも親和性の高い方法で）果たされているとも言える。それだけに、究極的根拠付けに固執する超越論的語用論の立場は不可解なものに映るのであり、その理解し難さが議論の停滞を招いていると言える。『哲学の変換』においてその構想が示されて以降、1970年代および80年代には批判的合理主義との激しい論争やハーバーマスとの決裂などがあったが、その後議論は平行線を辿ったまま細分化し、現在に至るまで目立った展開が無い。

このような現状を打破するためには、超越論的語用論の根本的な動機とその論証戦略を貫く諸前提とを明示化し、誤解と無理解の種を除いていく必要がある。そもそも、アーペルやクールマン自身からして、自らのことを誤解しているように思われる。それは即ち、超越論的語用論が展開している議論は、厳密には「カントの意味での古典的超越論哲学の言語哲学的変換」とは言えないということだ。ハーバーマスを含む複数の論者が指摘していることだが、それはむしろフィヒテの意味での超越論哲学の変換と見なすべきなのである。哲学的な究極的根拠付けという課題も、そのために用いられる自己関係性に依拠した論証戦略も、フィヒテの知識学にその源泉を見出すことができる。だがフィヒテへの言及はアーペルの著作群のごく一部についでのように見出される程度であり、指摘を受けた後もフィヒ

テ知識学を詳細に検討した形跡はない。

つまり、超越論的語用論がフィヒテ主義的であるとしたら、それは恐らく無意識的な、本人たちにとって不本意ですらある接近なのである。とは言え、全くの偶然というわけでもないだろう。なぜなら、フィヒテ知識学はカント哲学と同一の精神を持ちつつ、それを完成ないし徹底するものとして出発したのであり、特にカントによる哲学的根拠付けの不十分さを克服することが最初の動機の一つだったからだ。超越論的語用論の議論をフィヒテ知識学と関連付けて整理することは、その根本的諸前提の理解を大いに助けるだろう。また、フィヒテがカントの何を不十分と見なしていたのかを参照することは、超越論的語用論が例えばハーバーマスと対決する上でも重要なヒントを与えてくれるだろう。

他方で、超越論的語用論のフィヒテ主義的性格を鮮明にすることは、現代の言語哲学および認識論に対する貢献でもあると言える。なぜなら、ブランダムやマクダウェルといった代表的論者を見ても分かるように、カントやヘーゲルが重要な哲学的源泉になり得ることは現在の英語圏の哲学における共通認識となっているが、しかしフィヒテは殆ど顧みられないまま置き去りにされているのが実情だからだ。また、超越論的語用論はフィヒテ的であるという従来の指摘がそもそも、言外に批判的なニュアンスを含んでいた。それは、フィヒテ哲学は現代ではもはや通用しない独我論的な意識哲学である、という一般的なイメージから来るものであろう。しかし、ヘーゲルとも違う独自のアプローチでカント哲学の補完ないし徹底を目指したのがフィヒテである、という点は見逃されるべきではない。その思想のアクチュアリティを示し、現代の議論に導入することができれば、カント主義とヘーゲル主義の二極化という状況に対して別の選択肢を示すことになるだろう。従って、フィヒテ哲学の言語哲学的変換の可能性を示し、その実例を紹介することの意義は、現代の哲学的議論の状況に照らしてみても、またフィヒテの再評価という観点からしても、決して小さくない。

本稿が、従来各論的に指摘されるにとどまっていた超越論的語用論のフィヒテ主義的性格を包括的に扱い、鮮明にすることを目標とするのは、このような見通しによるのである。

本稿の議論は次のような手順で進行していく。

第一章では、超越論的語用論の概要とその成立史を紹介し、超越論的語用論に対して向けられてきた主要な批判をクールマンに従い三点に整理する。そして、その中でも特にハーバーマスによる批判が強力であることを説明する。

続く二つの章において、超越論的語用論に見出される二つのフィヒテ主義的特徴を明らかにする。いずれの章においても、議論の鍵となるのはカントとフィヒテのアプローチの差異、そしてハーバーマスとアーペルのアプローチの差異である。

まず第二章では、自己関係性ないし自己還帰性の徹底という特徴を扱う。これはカント哲学において要請されながら具現化されなかったが、フィヒテの知識学はこれを第一の根本原則とし、ここから出発する。他方、現代の哲学的議論において、言語哲学的に自己関係性を再び徹底しようとしているのが超越論的語用論である。

第三章では、二つ目のフィヒテ的特徴として「下降」を扱う。カントの理論哲学は表象の多様から統覚の統一へと「上昇」するが、フィヒテは絶対的自我から個々の表象へと「下降」する。このようなアプローチの差異は、討議倫理をめぐるアーペルとハーバーマスの論争においても「出発点の違い」として顕在化しており、この点からもアーペルをフィヒテ主義者と見なし得る。

第四章では、超越論的語用論が掲げる「無限界の理想的コミュニケーション共同体」の理念をどう理解すべきか、という問題を扱う。フィヒテ知識学と対比するなら、これは「絶対我」ないし「絶対者」に対応する審級であるように思われる。だが「共同体」と言う以上、超越論的語用論はこのような絶対的審級の「方法的独我論」的性格に一石を投じていることになる。他方、第一章で紹介するハーバーマスからの批判を退けるためには、討議に際して共同体のメンバー間に共有されている「行為知」の唯一性に訴えることが不可避である。

この問題を解決するために、本章ではまずカントやフィヒテにおける類似の概念と比較しつつ理想手コミュニケーション共同体についての考察を深め、アーペルの言う「主観‐間主観的」という語の意味を理想的コミュニケーション共同体に即しつつ考察する。また、行為知についてのクールマンの見解を修正し、論証的討議の行為知は実在的コミュニケーション共同体において共有されており、個人の知には還元され得ないという議論を展開する。行為知に含まれる内容についても、それが理想的コミュニケーション共同体ないし超越論的言語ゲームの規則を含んでいることを説明する。本稿はアーペルやクールマンを擁護する立場を取りつつも、本人たちの議論の拡張を試みており、それが特に顕著であるのはこの第四章である。

結論では、本稿の内容を主に動機の面から再度総括し、未解決に終わった問題等について言及する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　嘉目道人　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	入江幸男
	副 査	大阪大学　教授	須藤訓任
	副 査	大阪大学　准教授	舟場保之
	副 査	上智大学　教授	大橋容一郎

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　超越論的語用論の再検討　――現代のフィヒテ主義は可能か――

学位申請者　嘉目道人

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　入江幸男

副査　大阪大学教授　須藤訓任

副査　大阪大学准教授　舟場保之

副査　上智大学教授　大橋容一郎

【論文内容の要旨】

本論文は、序論と第１～４章と結論からなり、Ａ４版、１９９頁、全体で１６２，６４９字からなる。

「序論」では、本論の背景と目標設定を説明する。ドイツの哲学者アーペルが『哲学の変換』において提唱した超越論的語用論は、カントの超越論哲学の言語哲学的変換を標榜している。だが、その論証戦略や目標設定には多くの疑問や批判が寄せられてきた。本論文は、超越論的語用論をカントよりもむしろフィヒテの知識学と包括的に関連付けることを試みる。それによって、超越論的語用論に向けられた疑問や批判への新たな応答を用意しつつ、超越論的語用論が持つ意義をより鮮明にすることが目的である。

「第一章」では、超越論的語用論の概要とその成立史を紹介し、超越論的語用論に対して向けられてきた主要な批判をクールマンに従い三点に整理し、その中でも特にハーバーマスによる批判が強力であることを説明する。超越論的語用論の議論の中でも有名なのは究極的根拠付けである。即ち、討議において(1)遂行的（自己）矛盾なしには否定できず、(2)論点先取に陥らずには演繹的に根拠付けられないものは、背後遡行不可能であり究極的に根拠付けられている。遂行的（自己）矛盾とは、基本的には発話における文ないし命題内容と、発語内行為の遂行の間の矛盾である。遂行的（自己）矛盾が問題となる場合に重要なのは、発語内行為の遂行が伴う、その行為についての反省的な知であり、クールマンはこれを「行為知」と呼ぶ。これに対して、ハーバーマスは、究極的根拠付け論証が懐疑論者（可謬主義者）の直観的なノウハウを明示的なノウザットとして記述する必要があること、そしてこの記述そのものは可謬的にならざるをえず、究極的根拠付けは不可能であると指摘する。またハーバーマスは、ノウハウとノウザットを同一視する超越論的語用論はフィヒテ的な意識哲学に逆行しているという。

本論文は超越論的語用論がフィヒテ的であることをむしろ積極的に認めるが、しかし意識哲学であるという点には同意しない。そして続く二つの章において、超越論的語用論に見出される二つのフィヒテ主義的特徴を明らかにする。そこでは、カントとフィヒテのアプローチの差異、そしてハーバーマスとアーペルのアプローチの差異が、議論の鍵となる。「第二章」では、自己関係性ないし自己還帰性の徹底という特徴に関して、超越論的語用論がフィヒテ主義的であることを示す。これはカント哲学では要請されながら具現化されなかったが、フィヒテの知識学はこれを第一の根本原則とし、ここから出発する。他方、現代において、言語哲学的に自己関係性を再

び徹底しようとしているのが超越論的語用論である。「第三章」では、二つ目のフィヒテ的特徴として「下降」を扱う。カントの理論哲学は表象の多様から統覚の統一へと「上昇」するが、フィヒテは絶対的自我から個々の表象へと「下降」する。このようなアプローチの差異は、討議倫理をめぐるアーペルとハーバーマスの論争においても「出発点の違い」として顕在化している。この「下降」という点からもアーペルをフィヒテ主義者と見なし得ることを示す。

「第四章」では、超越論的語用論が掲げる「(無限界の）理想的コミュニケーション共同体」（IKG）の理念を扱う。「共同体」と言う以上、超越論的語用論は「方法的独我論」に一石を投じていることになる。他方、第一章で紹介したハーバーマスからの批判を退けるためには、討議に際して共同体のメンバー間に共有されている「行為知」の唯一性に訴えることが不可避である。この問題を解決するために、本章ではカントやフィヒテにおける類似の概念と比較しつつ IKG についての考察を深め、アーペルの言う「主観 - 間主観的」という語の意味を IKG に即しつつ考察する。また、行為知についてのクールマンの見解を修正し、論証的討議の行為知は実在的コミュニケーション共同体において共有されており、個人の知には還元され得ないという議論を展開する。行為知に含まれる内容についても、それが IKG ないし超越論的言語ゲームの規則を含んでいることを説明する。本稿はアーペルやクールマンを擁護する立場を取りつつも、その議論をさらに拡張することを意図しており、それが特に顕著であるのがこの第四章である。

「結論」では、本稿の内容を再度総括し、未解決に終わった問題等について言及している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、アーペルに始まる討議倫理学に対する批判、特にハーバーマスからの批判、つまり「行為知」を明示的な「命題知」にする必要があるが、それは可謬的なものになってしまうという批判、またそれはフィヒテ的な意識哲学へと逆行することであるという批判、に応えようとする意欲的な力作である。本論文は、アーペルの超越論的語用論がカント哲学よりもむしろフィヒテ哲学に近いことを説得的に論証している。また、カントとフィヒテの比較についても重要な論点を提示することに成功している。他方で、フィヒテ哲学を言語論的に解釈することによってその現代的意義を明示しようとする意図の方は、まだ十分に展開されたとは言えないが、フィヒテの前期の著作から後期の著作まで広く渉猟して様々な可能性を引き出そうとする試みは評価に値する。また第四章での議論、「行為知」についてのクールマンの見解を修正し、論証的討議の行為知は、実在的コミュニケーション共同体において共有されており個人の知には還元されないという議論は、行為知の理解についての一つの有望な提案となっている。このアプローチは、現代分析哲学での共有知をめぐる議論とも関連しており、その意味でも今後の展開を大いに期待できる。しかし、本論にも問題がないわけではない。申請者は、討議倫理学に対する批判を回避するために究極的な根拠づけと背後遡行不可能性を区別し、究極的な根拠づけについてはこれを放棄し、背後遡行不可能性だけを主張しようしているが、この点は論文の中で明示的に論じられておらず、その点が惜しまれる。また図や概念について、説明が不足しているところが散見される。しかし本論文は、日本語で書かれたものではあるが、フィヒテ研究の上でも討議倫理学研究の上でも、国際的にも評価に値し、議論されるべき成果であると思われる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。